

Title	Japanese D3 lymph node dissection in low rectal cancer with inferior mesenteric lymph node metastases
Author(s)	産形, 麻美子
Journal	2014
URL	http://hdl.handle.net/10470/30822

様式 (6)

学 位 審 査

学 位 番 号	乙第 2828 号	氏 名	産形 麻美子
審 査 委 員 会	主 査 教 授	亀岡 信悟	
<p>論文審査の要旨</p> <p>論文のタイトルは「Japanese D3 lymph node dissection in low rectal cancer with inferior mesenteric lymph node metastases」(下腸間膜動脈根リンパ節転移を有する下部直腸癌におけるD3リンパ節郭清の意義に関する検討)である。</p> <p>【目的】現在、大腸癌取扱い規約において Inferior mesenteric lymph nodes (以下、IMLN)は「下腸間膜動脈起始部より左結腸動脈起始部までの下腸間膜動脈に沿うリンパ節」と規定されており、直腸癌とS状結腸癌に対してD3郭清を行う場合に郭清すべきリンパ節とされている。しかし、下部直腸癌におけるその郭清効果や予後解析は不十分であり、R0根治切除の意義に関して一定の見解が得られていない。今回著者は全国大腸癌登録情報を用いて、後方視的にIMLN転移を有する下部直腸癌におけるリンパ節郭清効果について解析を行った。【対象と方法】大腸癌研究会全国登録に登録されている下部直腸癌2743例を対象とし、1. IMLN転移例の予後因子、2. IMLN転移R0症例(総リンパ節転移個数\geq7個)の予後を検討した。【結果】IMLN陽性症例は67症例(2.7%)認められ、IMLN転移R0症例35症例の予後は5年RFS=50.8%、5年OS=61.9%であり、R1+R2症例の予後(5年RFS=16.1%、5年OS=26.7%)と比し予後は良好であった(RFS: $p=0.0001$, OS: $p=0.0002$)。総リンパ節転移個数7個以上の症例に限定して予後比較を行ったところ、IMLN転移(+)R0症例の予後(5年RFS=53.9%、5年OS=68.8%)は、IMLN(-)症例の予後(5年RFS=54.6%、5年OS=57.1%)と比し、予後に明らかな差は認められなかった(RFS: $p=0.9515$, OS: $p=0.4621$)。【考察および結論】下部直腸癌におけるIMLN転移例は、総リンパ節転移個数が多い傾向にあるが、根治切除がなされれば、一定の予後が期待できることが確認された。以上より、IMLN転移を有する下部直腸癌において、根治性の得られるD3リンパ節郭清の意義はあると考えられた。</p> <p>以上、臨床的に極めて価値ある論文である。</p> <p>本要旨は当該論文が第二次審査に合格した後の1週間以内に学務部医学部大学院課へご提出下さい。(本学学会雑誌に公表)【学校教育法学位規則第8条】</p>			

